

4. 近世人の常識(3) —身分と属性

2025. 5. 8. 大橋 幸泰

はじめに

身分とは／秩序・体制の維持のために人為的に創作された、尊卑上下の観念をともなう社会的地位
→身分社会の時代／近世社会が想定されやすい／士農工商という強固な身分イメージ
→それから派生する問題／近現代における被差別民への差別は近世以来の遺物／身分とは封建遺制
* この言説は正しいか？／差別のない社会を実現するにはどうすればよいか？

1. 近世身分論の研究史

(1) 戦後～1980年代まで

戦後歴史学／身分論は被差別部落史からスタート

→三位一体論／身分(えた)・職業(皮革産業)・居住地(被差別部落)の一体性が近世の特徴

→さらに、三位一体的存在形態は被差別身分に限らない、との指摘

* 近世のどの身分にも当てはまる／近世の身分は、身分・職業・居住地が一体となって成立

→その契機は豊臣政権の兵農分離政策にともなう身分の成立／政治起源説

→しかし、1980年前後、政治起源説を覆す議論が浮上

a. 豊臣政権の画期性に対する疑問

b. 身分は社会的分業を前提に、国家から課された役負担により決定された、との指摘(高木昭作)

c. 身分はその集団(地縁的・職業的身分共同体)の構成員によって決定された、との指摘(朝尾直弘)

「士農工商えた非人」という身分序列が、政治起源によって成立したとする説への疑問

* 実際には、多様な身分や中間的な身分が存在

(2) 1980～2000年代

高木説・朝尾説を前提に、1980年代以降、身分論は集団論として展開

* 身分を、公儀の御用・役を務める自律的な集団と規定／生業と結びつく多様な身分集団を「発見」

→身分的周縁論の登場

* 賤民論・都市論・朝幕関係論などと呼応して、士農工商という近世の堅い身分理解を突き崩す

(3) 2000年代以降

身分的周縁論をめぐる議論／近世社会の多様性を証明／ただし、批判も存在

a. 集団論の限界／公儀身分制に適應される者のみが対象

→権力から公認されることが、身分として成立することの条件

→しかし、非公認の存在形態のみならず、集団で存在しない形態の身分もありうる

* たとえば、女性、家長を除く家族、社会的逸脱層、宗教的異端、など

b. 周縁論の矛盾／「周縁」とは「中心」を前提とする概念

→かえって固定的身分理解に回帰

* 身分的周縁論は、士農工商という近世における固定的な身分理解を批判して、それを突き崩そうとする研究動向であったはず／しかし、現実の多様な身分集団を「周縁」という言葉で表せば表すほど、「中心」と考えられている身分の固定化を促すという矛盾

2. 近世身分の現実

(1) 個としての身分

身分論には、集団論とは異なる分析視角も必要

* もちろん、近世社会は身分別支配が特徴／多様な身分集団が存在したことは確かだし、それを権力がどのように編成したのかというのは重要な論点なので、集団論としての身分論が不要というのではない

→ 集団論とは異なる身分論／「個としての身分」という捉え方

* 上昇願望・身分移動／「身上がり」の希求

→ 現実には、身分を担うのは個人／集団ではなく個人レベルの問題

(2) 士農工商(四民)とは何か

士農工商／前近代、儒教文明圏社会における人民を指す語

* 近世日本でも、尊卑上下の関係を意味する語として用いられていない

→ 職分論・家業論を展開する際、士農工商の語が用いられる

* 支配・被支配の関係でなく、横並びで解釈／「上下無し」の希求

→ 士農工商とは、特に農工商の被治者が自分の存在意義を主張する際に持ち出す言説

* ただし、マイノリティー身分(賤民身分)への差別視と表裏

(3) 現実の身分制社会

頂点身分・士農工商・賤民身分の三分が基幹身分／尊卑上下関係をともなうが、同時に役割意識も付随

・ 頂点身分／天皇・将軍・大名とそれを補佐する上級貴族・武士

・ 士農工商／下級武士のほか、あらゆる生業に従事する一般人民

・ 賤民身分／えた・非人のほか、宗教的芸能者など賤視された人びと

→ それぞれの役割意識が、被治者による治者批判の基盤を形成

3. 人々の身分願望と身分の再編成

(1) 近世人の身分願望

a. 「身上がり」(上昇願望)／士分や特権の獲得により、他者より優位に立とうとする観念を希求／実際、身分の移動が存在／ただし、誰にでも可能だったわけではないことに注意

b. 「上下無し」(平等主義)／職分論・家業論(士農工商論)の展開により、横並び観念を醸成

→ 「身上がり」と「上下無し」／両者への希求が、尊卑上下関係をともなう現実の身分秩序を揺さぶる

→ この延長線上に、明治初年、四民平等の達成／しかし、身分の解消には結実しない

(2) 近代国民国家における身分

近代の国民国家では、国家の仕組みとして、建前上、支配・被支配の関係や尊卑上下の関係が否定される

* 国家の成員は一律に国民として、国家を主体的に支える役割を期待される／国民の創出

→ しかし、国民という想像上のカテゴリーの成立とともに、身分が消滅したのではない

・ 近代／天皇(皇族)、華族、平民、新平民、という新たな身分の創出

・ 現代／日本国憲法(1947年施行)ではあらゆる身分は否定されているが、現実には尊卑上下観念が存在

* その背景に、人々の上昇願望と、一君万民思想をともなう平等主義／近代・現代における身分の再編成

おわりに

身分とは尊卑上下の観念をともなう人間の序列

→ 現代を含め、歴史上、身分がなかった時代はない(ただし、人類の黎明期を除く)

* それぞれの時代の国家・社会の構造や秩序にそくして、身分の存在形態やその意味を考えるべき

→ 近代・現代に存在する身分は封建遺制ではない／それぞれの時代固有の尊卑上下観念のもとに再編成

→現代社会では、見えにくくなっている身分の存在形態に注目しつつ、なぜそれが見えにくくなっているのかを考えるべき

属性論の提起

*** 一つの集団も一人の個人も、単一の属性では成り立たないことを意識して歴史を見る方法**

→人と人との境界／人間は、序列の観念をともしなわれない、多様な属性のなかに存在

*** 生業、職分、家業、性別、血縁、地縁、居住地、出身地、出自、宗教、世代、所有物、状態など、人を取り巻く、あらゆるものが属性になり得る／長期間持続するものもあれば、短期間で終わるもの、一瞬だけ生じるものなど、その現れ方は多様／その最大のものは、地球人・地球市民という属性**

属性論を意識すること／歴史を含め、あらゆる物事の単純化を回避できるとともに、現代・未来において差別の解消を実現するにはどうすればよいかを考える契機となる

*** 身分とは属性に尊卑上下の観念が加わった人間のカテゴリー**

→いまある身分を属性に変えるには、どうすればよいか？

【参考文献】

部落問題研究所編『日本歴史の中の被差別民』（新人物往来社、2001年）

高木昭作『日本近世国家史の研究』（岩波書店、1990年）

朝尾直弘『都市と近世社会を考える』（朝日新聞社、1995年）

塚田孝・吉田伸之・脇田修 編『身分的周縁』（部落問題研究所、1994年）

高埜利彦 他編『シリーズ近世の身分的周縁』全6巻（吉川弘文館、2000年）

後藤雅知 他編『身分的周縁と近世社会』全9巻（吉川弘文館、2007年）

塚田孝『近世身分社会の捉え方—山川出版社高校日本史教科書を通して—』（部落問題研究所、2010年）

深谷克己『江戸時代の身分願望』（吉川弘文館、2006年）

大橋幸泰 他編『〈江戸〉の人と身分』全6巻（吉川弘文館、2010-11年）

深谷克己・須田努編『近世人の事典』（東京堂出版、2013年）

大橋幸泰「近世日本の民衆史研究—民衆運動・政治思想・身分認識をめぐる議論から属性論の射程を展望する—」（『民衆史研究』102、2022年、後、『近世日本邪正論』勉誠社、2024年に所収）

【付記】

・明日までに、Hoppiiにて講義記録の提出を求める。